

I 研究の概要

I 研究の概要

1. 研究主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
 - (1) 平成 24 年度までの研究の概要
 - (2) 現在の研究主題について
 - (3) 本校における「キャリア発達」の捉え
2. 研究の枠組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
 - (1) 研究目的
 - (2) 研究内容
 - (3) 研究体制
3. 一年次（平成 26 年度）、二年次（平成 27 年度）の研究・・・・・・ 4
 - (1) 研究の年間計画（実施済み）
 - (2) 一年次（平成 26 年度）の実施内容
 - (3) 二年次（平成 27 年度）の実施内容
4. 三年次（平成 28 年度）の研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
 - (1) 研究計画
 - (2) 授業実践のまとめ
 - (3) 「キャリア教育の視点」から 3 年間の研究を振り返る

I 研究の概要

1. 研究主題設定の理由

(1) 平成 24 年度までの研究の概要

本校では、平成 20 年度から 24 年度までの 5 年間、ICF（国際生活機能分類）の理念に学びながら実践研究を行ってきた。

その中で、①児童生徒・保護者・教師の三者の思いをもとに目標設定を行い、教育実践につなげること、②学習活動の中で、児童生徒自身による目標設定や振り返りを行うこと、③児童生徒の「行動や言動を含むあらわれ」を丁寧に見取ること、を大切にしてきた。特に、③については、児童生徒の思いや願い等を「内面」と捉え、「内面」を構成する要素の中で「要求」、「既有知識」、「自己認識」、「自己効力感」の 4 つに着目した。（図 I－1、図 I－2 参照）

一方で、これまでの 5 年間の研究では、主に個人に焦点を当てて「育ち」を見てきた側面が強く、研究の成果を教育課程や授業改善に具現化する視点が弱かったことが課題として挙げられる。

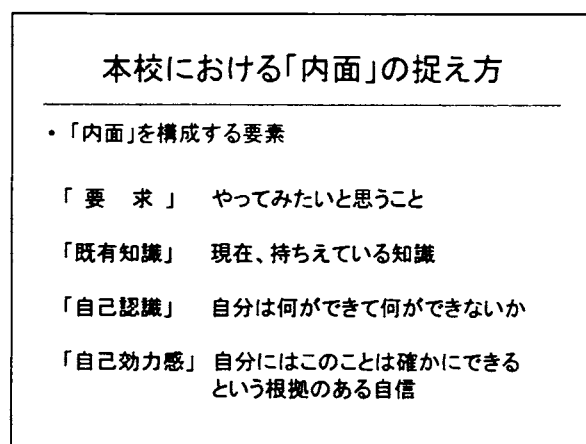


図 I－1 「内面」を構成する要素

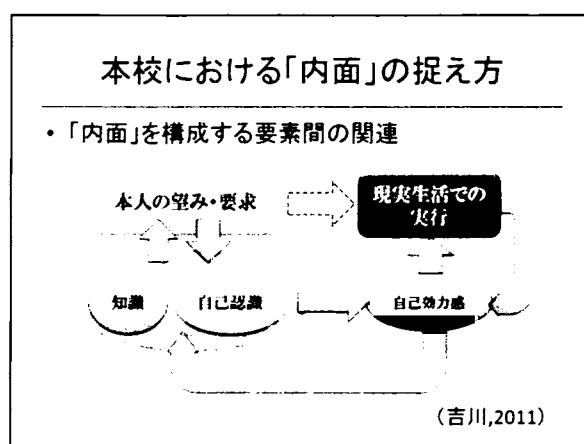


図 I－2 「内面」を構成する要素間の関連

(2) 現在の研究主題について

そこで、これまでの研究の成果を活かしつつ、課題を解決するために「キャリア教育の視点」を取り入れることにした。なお、「キャリア教育の視点」とは、「(将来の) 社会的・職業的自立を念頭に置きながら、子どもたちの成長や発達を促進しようとする見方を持つこと」⁽¹⁾であるとともに、「キャリア概念に基づき、現在行われている教育活動全体の見直しを図り、改善すること」⁽²⁾である。

以上の経緯から、平成 25 年度は、文部科学省委託事業「特別支援教育に関する実践研究充実事業」を受託し、「キャリア教育の視点からの教育課程を小中高 3 学部の一貫性、系統性、関連性の側面から再考する」の主題で学校研究に取り組んだ。そして、平成 26 年度からは文部科学省委託事業「キャリア教育・就労支援等の充実事業」を受託し、「キャリア発達支援の視点による小中高 12 年間を見通した学習活動の充実改善」の主題で学校研究に取り組んでいる。なお、平成 26 年度からの研究は、3 年計画で取り組んでおり、平成 28 年度は三年次にあたる。

(3) 本校における「キャリア発達」の捉え

中央教育審議会は、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(2011)の答申の中で、キャリア発達の定義を「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」としている。また、文部科学省は、「小学校・中学校・高等学校キャリア教育の手引き」(2011)の中で、キャリア教育を「子ども・若者が、社会の一員としての役割を果たすとともに、それぞれの個性、持ち味を最大限発揮しながら、自立して生きていくために必要な能力や態度を育てる教育」としている。

本校では、児童生徒一人一人のキャリア発達を捉える際に、これらの定義を踏まえつつ、平成20年度から平成24年度に本校で取り組んだ学校研究で得られた成果をもとに、以下のように捉えた。

【本校における「キャリア発達」の捉え】

子どもたちが経験を通して、自分や自分に関係性があるすべての事象に対する知識や認識を、より現実に即して新たにしていくこと。そして、その営みを繰り返しながら、自分らしい生き方を実現していくこと。

木村(2013)は、「キャリアは環境との相互作用の結果、個人の内部、内面において生まれて発達し、変化するという特性を持っている」と述べている。また、「キャリア教育は、生徒に将来の夢を言わせて、それをかなえるための教育や支援をしようとするのではない。なぜその子がそういう夢を持つようになったのか、これまでの経験や学びがその生徒にとってどういう意味をもたらしたのか、どうしてそういう願いを持つように至ったかということ、まず我々が理解する必要がある」「(大人から見て非現実的と思われる生徒の夢を否定せず)生徒のそのような経験や学びの背景に関心を持って、新しい学びを支援しようとしているところが重要だ。我々にとっても生徒のそういう姿にしっかりと向き合える成熟をしていかなければならない。」と述べている。

ここで述べられている教育観・指導観は、平成20年度から平成24年度に本校で取り組んだ学校研究での教育観・指導観と基本的に一致していると捉えている。

本校では、「我々が世の中を見て、何かを見出だす時には、自分たちが既に獲得している知識や概念を通して見ることによって意味を見出している」⁽³⁾という考えに依って、学校研究を進めてきた。そのため、「児童生徒の知識の持ち方は、我々大人にとって共通前提となるような知識の持ち方とは違うのではないか」⁽³⁾という見方を取っている。そこで、学習活動にあたっては、児童生徒と教師が同じものを見たり体験したりしても、両者の間で違う意味を見出している可能性があるため、「児童生徒の知識や自己認識を探る」とともに「児童生徒の知識や自己認識が現実に即していないと思われる場合には、より多くの人と共通前提となり得るような、より現実に即した知識や自己認識を持ち得る」⁽³⁾ようにしている。その際には、児童生徒が自分自身で体験し、自分に即して知識や自己認識を再構成する機会を設定するとともに、「何に気づいて再構成したらよいか」を児童生徒が気づけるように指導・支援している。

平成25年度から取り組んでいるキャリア発達支援の視点による学校研究でも、この教育観・指導観にもとづいて進めている。

2. 研究の枠組

本研究主題のもと、次に挙げる目的、内容、体制で研究に取り組んでいる。

(1) 研究目的

- ・児童生徒のキャリア発達を促す教師の支援や授業の在り方を明らかにする。
- ・これまでの学習内容や、その関連性、系統性および学部間の連携、地域との連携等について検討する。

(2) 研究内容

①児童生徒のキャリア発達を促す授業実践（小学部・中学部・高等部）

児童生徒のキャリア発達を促すための教師の支援や授業の在り方について、各部での実践を通して、検討を行う。また、キャリア発達支援に関する講演会やワークショップの手法を取り入れた研修等を通して、学習内容の検討も行う。

②高等部作業学習の充実改善（高等部）

生徒の技能と働く上での資質の向上を目指した作業学習の在り方について実践を通して検討を行う。

③就労移行支援事業所と連携した高等部進路指導の改善（高等部）

企業就労アセスメント実習の評価表の作成・実習計画と内容の確立・進路指導計画及び生徒と保護者へのキャリアガイダンスの観点の整理・評価結果の個別の指導計画への反映について検討する。

(3) 研究体制

研究体制は、図 I - 3 に示したとおりである。

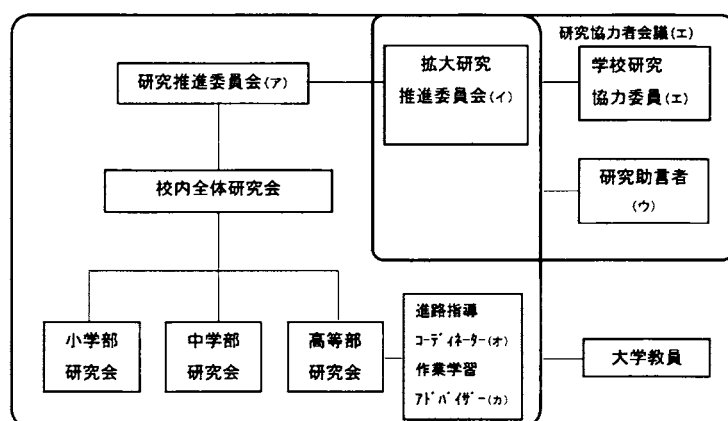


図 I - 3 研究体制

(ア)研究推進委員会を設置する。研究主任、研究課担当の部主事と小学部、中学部、高等部の研究推進委員で構成される。

(イ)拡大研究推進委員会を開催する。副校長、教頭、各部主事と研究推進委員会の委員で構成される。

(ウ)研究助言者3名を招聘する。研究の進め方等について年数回助言をいただく。

(エ)研究協力者会議を年2回開催する。民間事業者、福祉・就労の関係機関の方々(10名)で構成される。本校の研究授業を参観いただく。

研究協力者会議には研究助言者に参加いただくこともある。

(オ)高等部に進路指導コーディネーター1名を配置する。

(カ)作業学習の充実・改善の取組では、作業学習アドバイザーを配置する。



研究協力者会議



進路指導コーディネーター

3. 一年次（平成 26 年度）、二年次（平成 27 年度）の研究

（１）研究の年間計画（実施済み）

一年次（平成 26 年度）、二年次（平成 27 年度）は表 I－1、表 I－2 のとおり計画を立て、実施した。研究を進めるにあたって、表 I－3 のようにキャリア教育に関する研修を行った。なお、キャリア教育に関する研修は平成 25 年度のものから記載した。

本校の研究成果を発表する機会として、一年次（平成 26 年度）、二年次（平成 27 年度）とも夏季休業中に「研究フォーラム」、2 月に「教育研究会」を行った。

表 I－1 一年次（平成 26 年度）の研究実施表

月	学校全体		各学部	
	会議・研修等	研究会		
4 月		・研究推進委員会 ・拡大研究推進委員会 ・全体研究会		
5 月	・キャリア教育研修 3	・研究推進委員会	・部研究会	
6 月		・研究推進委員会 ・全体研究会	・部研究会 ・中高合同研究会	
7 月	・キャリア教育研修 4 ・キャリア教育研修 5 ・研究協力者会議	・研究推進委員会	・部研究会 ・中高合同研究会	
8 月	・研究フォーラム ・キャリア教育研修 6 ・出張報告会	・研究推進委員会 ・全体研究会	・部研究会	
9 月			・部研究会	
10 月		・拡大研究推進委員会 ・全体研究会	・部研究会 ・中高合同研究会	
11 月		・研究推進委員会 ・拡大研究推進委員会	・部研究会	
12 月	・キャリア教育研修 7	・研究推進委員会	・部研究会	
1 月		・研究推進委員会	・部研究会 ・中高合同研究会	
2 月	・教育研究会 ・キャリア教育研修 8 ・出張報告会	・研究推進委員会	・部研究会 研究授業（全）	
3 月	・研究協力者会議 ・キャリア教育研修 9 （ワークショップ 1）	・研究推進委員会 ・拡大研究推進委員会 ・全体研究会		

表 I－2 二年次（平成 27 年度）の研究実施表

月	学校全体		各学部	
	会議・研修等	研究会		
4 月		・研究推進委員会 ・拡大研究推進委員会 ・全体研究会		
5 月	・ワークショップ 2	・研究推進委員会	・部研究会	
6 月		・研究推進委員会 ・全体研究会	・部研究会	
7 月	・ワークショップ 3 ・研究協力者会議 ・研究フォーラム ・キャリア教育研修 10	・研究推進委員会	・部研究会	
8 月	・出張報告会	・研究推進委員会 ・全体研究会	・部研究会	
9 月			・部研究会	
10 月	・授業公開 ・キャリア教育研修 11	・拡大研究推進委員会 ・全体研究会	・部研究会 ・研究授業（高）	
11 月	・キャリア教育研修 12	・研究推進委員会 ・拡大研究推進委員会	・部研究会	
12 月		・研究推進委員会	・部研究会	
1 月	・授業公開	・研究推進委員会	・部研究会 ・研究授業（小・中）	
2 月	・教育研究会 ・キャリア教育研修 13	・研究推進委員会 ・拡大研究推進委員会	・部研究会 研究授業（全）	
3 月	・研究協力者会議 ・出張報告会	・研究推進委員会 ・全体研究会		

表 I－3 平成 25、26、27 年度のキャリア教育研修実施表

№	月 日	テーマ	講師
1	平成 25 年 11 月	「キャリア発達を促す教育」の理念と知的障害教育における在り方	北海道札幌福祉高等支援学校校長（当時） 木村 宣孝 氏
2	平成 26 年 2 月	キャリア教育とキャリア発達支援の意味 ～キャリア発達を支援することを通じた学校改革～	京都市教育委員会指導部総合育成支援課専門主事 森脇 勲 氏
3	平成 26 年 5 月	福祉制度の仕組みとアセスメントについて	NPO法人LIAISON 理事長 中山 肇 氏
4	平成 26 年 7 月	障害者の性被害について（保健指導）	まき助産院助産師・思春期保健相談士 川島 真希 氏
5	平成 26 年 7 月	「言葉」と「数」の獲得過程と指導について	金沢大学人間社会研究学域学校教育系教授 吉川 一義 氏
6	平成 26 年 8 月	特別教育支援教育との接点を求めて－障害児・者支援の原点－	仙台市泉区保健福祉センター障害高齢障害者支援係長 矢木 聡 氏
7	平成 26 年 12 月	・重度知的障害者は貴重な企業戦力（保護者向け研修） ・優良人材育成に向けた教育への期待（職員向け研修）	（株）三越伊勢丹ホールディングス特例子会社 （株）三越伊勢丹ソレイユ 代表取締役社長 内玉天 正邦 氏
8	平成 27 年 2 月	キャリア発達の視点から教育活動を捉え直す	青森県教育庁学校教育課特別支援教育推進室指導主事 菊地 一文 氏
9	平成 27 年 3 月	キャリア発達を促す教育を推進する学校組織であり続けるために	北海道立特別支援教育センター所長（当時） 木村 宣孝 氏
10	平成 27 年 7 月	キャリア発達支援における評価のあり方	青森県教育庁学校教育課特別支援教育推進室指導主事 菊地 一文 氏
11	平成 27 年 10 月	子ども主体の生活を実現する領域・教科を合わせた指導 （講演と本校での実践に関する質疑応答）	岩手大学教育学部 教授 岩手大学教育学部附属特別支援学校 校長 名古屋 恒彦 氏
12	平成 27 年 11 月	・社会参加に向けて～育てておきたい子どもの力～（保護者向け研修） ・明日をつくるかわかりの力～わかるように、できるように（通訳）する～（職員向け研修）	ベル相談室 室長 臨床心理士 角田 みすゞ 氏
13	平成 28 年 2 月	キャリア発達支援の視点による学習活動の充実改善のあり方（シンポジウム）	京都市教育委員会指導部総合育成支援課専門主事 北海道立特別支援教育センター所長（当時） 森脇 勲 氏 木村 宣孝 氏





（２）一年次（平成 26 年度）の実施内容



ア．児童生徒のキャリア発達を促す授業実践の取組

I 章－１で述べた教育観・指導観にもとづいて、各学部で実践を行った。小学部低学年では「自分の好きなことや得意なことを見つけ、楽しく主体的に活動する児童」の育成を、高学年では「自分の役割を知り、その役割を果たそうとする児童」の育成をそれぞれ目指して授業実践に取り組んだ。中学部では「仲間と協力して一つの活動に取り組み、成し遂げる」姿を目指して授業実践に取り組んだ。高等部では、「卒業後に自分が希望する生活の実現を目標に切磋琢磨する」姿を目指し、作業学習モデルプランの開発の実践と進路指導の充実改善の取組を行った。

以下表 I－４は、一年次（平成 26 年度）に取り組んだ各学部の実践（①児童生徒のキャリア発達を促す授業実践、②作業学習モデルプランの開発、③進路指導の充実改善）の概要についてまとめたものである。

表 I－４ 一年次（平成 26 年度）実施した各学部の実践

授業名等		内 容
小学部	①遊びの指導 「シャボン玉遊びをしよう」 	低学年の実践は、一人の児童が始めたシャボン玉遊びに、他の児童も関心を持った様子を教師が捉え、遊びの指導での「シャボン玉遊び」として発展させた活動である。 （平成 26 年 4 月～7 月に実施）
	①生活単元学習 「お店やさんをしよう」 	高学年の実践は、下学年の児童や来校者に対して、ゲーム等を提供するお店やさん「ふしぎやさん」の活動を発展させながら取り組んだ活動である。 （平成 26 年 9 月～平成 27 年 2 月に実施）
中学部	①生活単元学習 「めった汁まつりをしよう」 	中学部の実践は、中学部 3 年の生徒が「栽培した野菜を調理し、下学年の生徒にごちそうしたい」という思いから、郷土食であるめった汁をふるまう「めった汁まつり」を企画し、中学部全体の行事に広げた活動である。 （平成 26 年 11 月～12 月に実施）
高等部	②作業学習 プラタナスカフェ ～大学、大学生協と協働した実践作業学習～ 	お客様とのやりとりや商品流通を体験する場として、平成 26 年 10 月に金沢大学附属図書館医学図書館「プラタナスカフェ」を開設した。開設前から、生徒が「私たちの店」として捉え、「よい店づくり」の意識を持てるように取り組んだ実践である。 （平成 26 年 4 月～実施）

授業名等		内 容
高 等 部	②クリーン工房 作業学習 ～社会人と協働する作業学習～ 	<p>環境整備を行うクリーン工房の生徒が、金沢大学で勤務する技能補佐員（県内の特別支援学校の卒業生）とともに本校で作業活動を行った。校内の窓掃除では、高等部生徒1名と技能補佐員1名とでペアを組んで作業を行い、本校の生徒が社会人との技術や仕事に対する姿勢の違いに気づくように取り組んだ実践である。</p> <p>（平成26年4月～平成28年3月に実施）</p>
中 学 ・ 高 等 部	③進路指導の充実改善 	<p>中学部3年での就業体験と高等部1～3年での産業現場等における実習との間につながりを持たせるための方策等について、中高合同研究会を開催して話し合いを行うとともに、各部で実践を行った。</p> <p>また、就労移行支援事業所と連携した「企業就労アセスメント実習」の仕組作りに着手した。</p> <p>（平成26年4月～実施）</p>

イ. 成果と課題

本校のこれまでの研究を生かして、各学部での実践を「何に取り組んだのか」（アウトプット評価）だけでなく、「どのような成果が見られたのか」（アウトカム評価）も一緒にまとめることができた。しかし、「活動中に見られた児童生徒の『行動や言動を含むあらわれ』をどのような方法で見取るのか」を明確に示すことができなかった。

各学部において大切にしたいことや目指す児童生徒の姿を確認し、児童生徒のキャリア発達を促す授業実践を通して、過年度の研究において大切にしてきた「内面の変容」への着目と働きかけの重要性を再認識した。具体的には、日々の関わりや授業実践の中で、児童生徒の行動の変容とともに内面の変容に着目し、「児童生徒たちの好きなことや得意なことを探る」「言葉にできない思いを代弁する」「生徒とともに目標を設定する」「充実感や達成感を得るような活動の場を設定する」「自分だけでなく友だちの様子や活動にも意識を向けるよう働きかける」「自分を振り返る場の設定や働きかけをする」等の支援を行っていくことが、キャリア発達を促すために、教師の役割として大切であると改めて学んだ。

学部間の連携では、中学部、高等部の6年間を見通した進路指導計画を検討作成し、実践を行った。中学部・高等部の教師が合同研究会の時間を取って各学部の進路指導の現状を相互に確認しながら改善点や課題を見出すことができた。

一年次（平成26年度）は、児童生徒のキャリア発達を促す授業実践を行うために、各学部の中核となる学習活動の内容と方法について検討した。しかし、実施した各学部の実践（表I-4）が小中高12年間の学校生活の中でどのようなつながりがあるのかを話し合うまでには至らなかった。小中高12年間の学習活動の関連性や系統性についても焦点を当て、検討を行っていくことが課題として残った。そこで、二年次（平成27年次）の研究は、実践と並行して小中高での学習内容の関連性や系統性、各学部の独自性について検討するため、ワークショップの手法を取り入れた職員研修を実施する計画を立てた。

(3) 二年次（平成 27 年度）の実施内容

ア. 小中高 12 年間を見通した学習活動の充実改善の検討

二年次である平成 27 年度は、各学部での授業実践と並行して、小中高 12 年間を見通して学習活動を充実改善させるための観点についても検討した。

小中高での学習内容の関連性や系統性、各部の独自性についてワークショップの手法を取り入れた職員研修（講師 木村宣孝氏（北海道立特別支援教育センター 当時））を通して検討したり、本校の教育課程上、中核となる指導形態である遊びの指導（小学部低・中学年）、生活単元学習（小学部高学年、中学部）、作業学習（高等部）等の領域・教科を合わせた指導についてキャリア教育研修（講師 名古屋恒彦氏（岩手大学教授））を実施して理解を深めたりした。

また活動中に見られた児童生徒の「行動や言動を含むあらわれ」を見取る方法について検討するため、「キャリア発達支援における評価の在り方」をテーマに研究フォーラムを開催し、菊地一文氏（青森県教育庁学校教育課指導主事）から一年次（平成 26 年度）の実践に対する助言と講演をいただき、キャリア教育の定義（※中央教育審議会答申 2011 年）に沿った評価の在り方について知り、授業実践の評価の方法について再考した。単元の目標と評価について明記し、部研究会等で授業実践について検討するための様式（様式 1）や本校として児童生徒の「内面」を捉えるための様式（様式 2）を作成し、授業実践で使用した。（各様式については 21、22 ページ参照）

※「キャリア教育」の定義

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

（中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」平成 23 年 1 月 31 日）

イ. 授業実践のまとめ

①児童生徒のキャリア発達を促す授業実践

小学部はキャリア教育のキャッチフレーズ（※国立教育政策研究所作成パンフレット）の中から、「自分に気付く」のキーワードをもとに「自分の好きなことや得意なことに気づき、主体的に楽しく活動する姿」を目指して授業実践を行った。中学部は領域・教科を合わせた指導に関する研修（名古屋 2015）で紹介された「ライフステージに応じたやりがいと手応えのある学校生活」を目指して授業実践を行った。高等部は作業学習モデルプランの取組がキャリア教育のキャッチフレーズ「自分を社会に生かし、自立を目指すキャリア教育」に当てはまることを確認し、一年次（平成 26 年度）の成果と課題をもとに作業学習モデルプランの取組を充実改善させた。

※国立教育政策研究所発行のパンフレットに書かれているキャッチフレーズ
（「小学校・中学校・高等学校におけるキャリア教育推進のために」）





小学校 「自分に気付き、未来を築くキャリア教育」

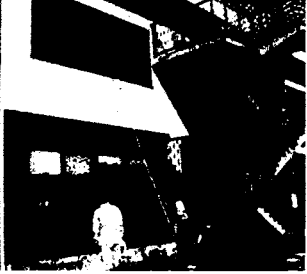
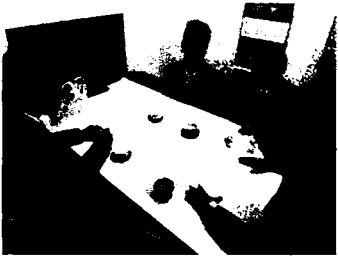
中学校 「自分と社会をつなぎ、未来を拓くキャリア教育」

高等学校 「自分を社会に生かし、自立を目指すキャリア教育」

以下表Ⅰ－５は、二年次（平成 27 年度）取り組んだ各学部の実践（①児童生徒のキャリア発達を促す授業実践、②作業学習の充実改善、③進路指導の充実改善）概要についてまとめたものである。

表Ⅰ－５ 二年次（平成 27 年度）実施した各学部の実践


授業名等		内 容
小学部	①遊びの指導 「どろんこ遊びをしよう」 	<p>低学年では、児童が好きな遊びを組み合わせた「泥んこ遊び」を取り上げた。</p> <p>教師が児童の思いを捉えながら、遊びのモデルや友だちとの遊びの仲介役等になり、一緒に遊んでいく中で、何事にも教師の承認を求めることが多かった一人の児童が思い切り遊びこんだり、安心して自己主張したりできる経験を積み重ねた実践である。</p> <p>（平成 27 年 5 月～6 月に実施）</p>
	①生活単元学習 「うきうきデーに行こう」 	<p>高学年の実践は学級別の校外学習である「うきうきデー」の取組である。</p> <p>「活動への期待を高めるための事前学習」→「事前学習により見通しをもって体験した校外学習」→「思い出を振り返って活動を意味付け・価値付けするための事後学習」の流れの中、児童が安心して自分の思いや楽しかった体験を他者に伝えられるようになった実践である。</p> <p>（平成 27 年 10 月に実施）</p>
中学部	①生活単元学習・作業学習 「店員さんになって、ポップコーンを販売しよう」 	<p>中学部で毎年実施している里山学習でトウモロコシを栽培し、ポップコーン製品を作り、学習発表会でポップコーン販売を行う活動を再考察した取組である。考え方の特徴を推察し、理解しやすい授業を積み重ねることで、入学当初から自信のなさが目立った生徒が、既有知識を更新し、成功体験を積み、自己効力感を高めることができるよう単元作りをした実践である。</p> <p>（平成 27 年 10 月～11 月に実施）</p>
高等部	②プラタナスカフェ 作業学習 「一周年祭を盛り上げよう」 	<p>昨年度からカフェの作業を行っている生徒が、後輩に接客業務の大切な事柄や技術を伝えることを通して“ともに育つ”ことに取り組んだ実践である。生徒同士が学び合うカフェの運営は、生徒が意欲的に作業に取り組み、自らを向上させようという気持ちを育てるものとなった。</p> <p>（平成 27 年 9 月～10 月に実施）</p>



授業名等		内 容
高 等 部	②クリーン工房 作業学習 「窓そうじ～来校される方が気持ち 良いと感じる学校にしよう～」 	環境整備を行うクリーン工房の生徒が、金沢大学で勤務する技能補佐員（県内の特別支援学校の卒業生）とともに本校で作業活動を行った取組である。 平成 27 年度は、社会人との協働作業を単元化し時数や作業種（窓そうじ）を限定することで作業の目的を明確化した。また定期的に自分について考えることをテーマにミーティングを行い、生徒が自己理解を深め、仕事の目標を達成するために必要な力をつけることをねらい、実践を行った。 （平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に実施）
	③進路指導の充実改善 	高等部 3 年間の産業現場等における実習（現場実習）の進め方を見直すとともに、一年次（平成 26 年度年度）から着手した「企業就労アセスメント実習」を充実改善させた取組である。 就労準備到達表を用い、生徒・教師・就労移行支援事業所の三者が同じ観点で生徒の現在の様子を評価し、実習後の目標設定に役立てることができた。 （平成 27 年 4 月～実施）

②学校だけで完結しない学習活動の取組

二年次（平成 27 年度）の研究では、文部科学省委託事業「キャリア教育・就労支援等の充実事業」に関する取組を行ってきたが、この他にも以下表Ⅰ－6 に示した学校だけで完結しない学習活動となる授業実践を行った。どの取組も機縁が重なって実現したものであるが、キャリア発達支援の視点による学校研究を行ってきたことで、本校の教員が地域協働学習について意識していたことも、実現につながった一つの要因であると捉えている。

表Ⅰ－6 二年次（平成 27 年度）実施した外部講師授業、交流学习（一部）

事業名等		内 容
高 等 部	【ダンスで交流】 （文部科学省 平成 27 年度「対話・創作・表現活動を取り入れた人間関係形成能力等の育成に資する教育活動に関する実践研究」） 	プロのダンサーで、日本ミュージック・ケア協会認定指導員の加藤善之氏を招聘して、年 3 回のセッションを行った。 金沢大学附属幼稚園の 5 歳児と高等部生徒が交流したセッションでは、両者が音楽の流れる中で身体表現等を通して打ち解けた様子が見られた。 園児にとっては、普段触れ合うことのない異年齢の生徒と同じ活動をする機会となり、本校高等部の生徒にとっても、年長者としての自分の役割を感じることができ、自己効力感を高められるよい機会となった。 （平成 27 年 10 月、11 月、12 月に実施）

事業名等		内 容
小学部	<p>【金沢市立工業高等学校との交流】 (公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団 平成 27 年度「モビリティ・マネジメント教育にかかわる学校支援」)</p> 	<p>本校小学部のニーズを受け、金沢市立工業高等学校電気科生徒が信号機やバスの降車ボタンの制作を行った。</p> <p>電気科の生徒にとっては、ユーザーのニーズを把握して製品を製作することを学ぶ機会となった。本校児童にとっては、信号機を見て横断歩道を渡るために必要な知識を分かりやすく学べる機会となった。</p> <p>(平成 27 年 11 月に実施)</p>
小・中学部	<p>【金沢美術工芸大学の学生によるワークショップ】(文化庁 平成 27 年度「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」)</p> 	<p>小学部児童と中学部生徒が、金沢美術工芸大学大学院の学生とワークショップを行った。</p> <p>小学部では、野菜を輪切りにしたスタンプを使用して作った木の葉や木を平面作品に仕上げた。中学部では大きな布に思いの絵の具を塗り重ね、貫頭衣に仕立てた。</p> <p>金沢美術工芸大学の大学院生にとっては、障害のある子どもたちの美術活動について理解を深める機会となった。児童生徒にとっては、学生の豊かな発想に触れる機会となり、楽しい雰囲気の中、生き生きと表現活動ができる機会となった。</p> <p>(平成 27 年 10 月、11 月に実施)</p>

ウ 成果と課題

①「キャリア教育の視点」から二年次の取組を振り返る

二年次(平成 27 年度)の実践では、教師が「(将来の)社会的・職業的自立を念頭に置きながら、子どもたちの成長や発達を促進しようとする見方を持つ」ことによって、次に挙げる態度や能力を育てることにつながったと思われる。

各部の実践を通して児童生徒に育った態度や能力は、渡辺(2010)の言葉を借りれば、小学部の実践では「知らないことに興味・関心を抱き、予測せぬことに恐れを持たず挑戦する態度」⁽⁴⁾、中学部の実践では「自分の存在自体に自信を持てるようになる」⁽⁴⁾とともに、「他者との関係の中で、社会的期待に応えていけるようになる」⁽⁴⁾こと、高等部の実践では「各個人が自分自身と向かい合って自分に問いかけ、自分に答える力」⁽⁴⁾であったと言える。

「キャリア概念にもとづき、教育活動全体の見直しを図り、改善する」という側面からは、職員研修で学んだことを生かして授業実践に取り組んだ。その結果、遊びの指導、生活単元学習、作業学習において、本校でこれまで大切にしてきた教育観を踏まえつつ、将来の社会的・職業的自立を念頭に置いて学習内容、授業作りを充実改善することができた。

②キャリア教育の理念にもとづいて、過年度の取組を振り返る

渡辺(2012)は「キャリア教育は教育改革の理念であり、キャリア教育に特化した特別の活動やイベントを行うことではない。つまり、学校教育をキャリア発達の視点から見直し、各教科を改善することである。したがって、教員の個人的な取組ではなく、学校全体で組織的に取り組む

ことが理念の実現には不可欠である。」⁽⁵⁾と述べている。また、研究助言者の木村宣孝氏からは、「教育活動を見直すためには、本校の成果と課題を明確にすることが重要である」ことを教えていただいた。ワークショップの手法を採り入れた研修や部を超えた研究会を行ったことによって、各教師が小中高 12 年間を見通したうえで、現在関わっている児童生徒にどのような態度や能力を育てたらよいかを考えるようになった。それが各学部の授業実践にも少しずつ反映されてきた。

4. 三年次（平成 28 年度）の研究

（1）研究計画

平成 28 年度の研究計画は表 I－7、キャリア教育に関する研修計画は表 I－8 のとおりである。また、本校の研究成果を発表する機会として、平成 28 年 8 月に「研究フォーラム」、平成 29 年 2 月に「教育研究会」を行うこととした。

表 I－7 三年次（平成 28 年度）の研究計画

月	学校全体		各学部	
	会議・研修等	研究会		
4月		・研究推進委員会 ・拡大研究推進委員会 ・全体研究会		研究授業① 授業整理会 (全)
5月		・研究推進委員会	・部研究会	
6月		・研究推進委員会 ・全体研究会	・部研究会	
7月	・研究協力者会議 (研究助言者・学校研究協力委員来校) ・キャリア教育研修1	・研究推進委員会	・部研究会	
8月	・研究フォーラム キャリア教育研修2 ・ワークショップ	・研究推進委員会 ・全体研究会	・部研究会	
9月			・部研究会	研究授業② 授業整理会 (全)
10月	・授業公開 (学校研究協力員来校)	・拡大研究推進委員会	・部研究会	
11月		・研究推進委員会	・部研究会	
12月	・キャリア教育研修3	・拡大研究推進委員会 ・研究推進委員会	・部研究会	
1月		・研究推進委員会	・部研究会	
2月	・教育研究会 キャリア教育研修4 (研究助言者・学校研究協力委員来校) ・出張報告会	・研究推進委員会 ・拡大研究推進委員会	・部研究会 ・研究授業(全)	
3月	・研究協力者会議 (学校研究協力委員来校)	・研究推進委員会 ・全体研究会		

※研究授業は各学部で計画立案し行う。

表Ⅰ－８ 三年次（平成 28 年度）のキャリア教育研修

年月	テーマ	講師
研修 1 平成 28 年 7 月	本校の実践に関する助言 講演 「地域協働活動によるマネジメ ントについて」	京都市教育委員会 指導部 総合育成支援課 専門主事 森脇 勤 氏
研修 2 平成 28 年 8 月	本校の実践に関する助言 講演 「キャリア発達支援における授業 作り」	青森県教育庁 学校教育課 特別支援教育推進室 指導主事 菊地 一文 氏
研修 3 平成 28 年 12 月	講演 「障害のある人の人生全体を考え る～知的障害のある自閉症の人 の一生から考える～」 (保護者研修)(教員研修)	独立行政法人 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 事業企画局 研究部長 志賀 利一 氏
研修 4 平成 29 年 2 月	本校の実践に関する助言 クロージングセッション 「キャリア発達支援の視点による 小中高 12 年間を見通した学習活 動の充実改善」3 年間の研究を振 り返って	京都市教育委員会 指導部 総合育成支援課 専門主事 森脇 勤 氏 北海道札幌高等養護学校 校長 木村 宣孝 氏 青森県教育庁 学校教育課 特別支援教育推進室 指導主事 菊地 一文 氏

※ 8 月の研修は、研究フォーラムの中で行う。2 月の研修は、教育研究会の中で行う。

(2) 授業実践のまとめ

①児童生徒のキャリア発達を促す授業実践の取組

二年次(平成 27 年度)は、学習活動を充実改善させるための観点を検討するためにワークショップや職員研修を重点的に実施したが、三年次（平成 28 年度）は二年次の研究の成果と課題を受けて授業実践を中心に取り組んだ。

対象とする授業実践は引き続き「領域・教科を合わせた指導」（遊びの指導、生活単元学習、作業学習のいずれか）を扱い、「キャリア発達を促す授業とはどのようなものか」、「(様々な実態の)児童生徒自身が学習に主体的に取り組む、自身で活動の意味付けや価値付けをできる授業とはどのようなものか」について各学部の教師が協議・考察しながら授業作りを進め、その過程をまとめることとした。学期ごとに各学部 1 回以上研究授業を実施し、併せて研究授業整理会を行った。研究授業整理会は「児童生徒の行動や言動からどのように内面を推察したか」や「児童生徒のどのような姿を以って、キャリア発達を促したと捉えたか」等話し合いのテーマを決め、児童生徒の学びのプロセスや研究授業に至る教師の授業作りのプロセスに関する話題を協議していった。

以下表Ⅰ－9 は、平成 28 年度に取り組んだ各学部の実践（①児童生徒のキャリア発達を促す授業実践、②作業学習の充実改善、③進路指導の充実改善）の概要についてまとめたものである。実践の詳細や成果と課題についてはⅡ章で述べる。

表Ⅰ－９ 三年次（平成 28 年度）実施した各学部の実践

授業名等		内容
小学部	①遊びの指導 「竹ランドで遊ぼう」（５月～７月） 	<p>小学部低・中学年では、児童らが集まり、友だちを意識したり関わったりできることをキャリア発達と捉え、小学部広場に作った「竹ランド」での児童の遊びの様子を詳細に分析しながら、児童の内面を丁寧に推察し、児童の育ちを考察した。授業を重ね、教師の関わり方や環境設定を改善していった授業作りの過程を実践としてまとめた。詳細はⅡ章１－２で述べる。</p>
	①生活単元学習 「季節の野菜を育てて食べよう」（９月～１２月） 	<p>小学部高学年では、２学期の畑での栽培活動を取り上げ、児童が「自分たちで植えた種や苗が野菜に育つ」という実感をより持てるように授業作りを行った。「育てたい野菜を自分で選ぶ」「選んだ野菜を種から見守る」「継続的に生長を観察し、比較する」等、児童が野菜の生長に気づき、意欲的に栽培活動に取り組めるよう検討を重ねた授業作りの過程を実践としてまとめた。詳細はⅡ章１－３で述べる。</p>
中学部	①自転車整備グループ 作業学習 「ベル交換をしよう」（７月） 	<p>中学部自転車整備グループでは、活動を通して自己効力感を高められることをキャリア発達として捉え、「生徒が自分の力を発揮して力いっぱい活動に取り組める」「人の役に立つ仕事ができる」活動はどのようなものか、生徒の内面の見取りから教師が話し合いを重ね、ねらいに合致する活動を探った。話し合いを経て計画、実施、振り返りを行った過程をまとめた。詳細はⅡ章２－２で述べる。</p>
	①ポップコーングループ 生活単元学習 「学習発表会でポップコーンを販売しよう」（１０月～１１月） 	<p>中学部ポップコーングループでは、学習発表会での販売活動を充実改善する授業作りを行った。昨年度の経験から出た「もっとたくさん売れるようにしたい」という生徒の言葉を起点として授業作りを始め、「生徒が自分の力を発揮して力いっぱい活動に取り組む」ために、販売するポップコーンの味を自分たちで決め、販売への意欲を持てるよう計画・実施した。Ⅲ章２－３で述べる。</p>
高等部	①チャレンジ工房 作業学習 「緩衝材づくり、軽作業」（４月～７月） 	<p>比較的支援を多く必要とする生徒たちの作業学習グループにおいて、キャリア発達の視点から授業作りを進めた過程を実践としてまとめた。</p> <p>「目標の実現に向けて実行努力する中で知識や認識を現実 に即して新たにしていこう姿」をキャリア発達と捉え、作業学習の目標や支援を再考察した。取組の結果、作業学習の目標や個別の指導計画の目標に迫ることができた。</p> <p>この実践は８月の教育フォーラムで発表した。本紀要での記載はない。</p>

	授業名等	内容
高 等 部	②菓子工房 プラタナスカフェ 作業学習「お客様の気持ちを考え 接客しよう」(4月～)	<p>昨年度先輩から接客業務の大切な事柄や技術を伝えられた生徒が、今年度はリーダーとして仕事に向き合っていく姿を追った実践である。</p> <p>緊張感のある日々の業務、作業学習アドバイザーの参観、作業学習委員会への参加等の活動の機会を計画・実施し、振り返りを重ねた。その結果、自身の乗り越えたい課題について自分なりの言葉で質問したり、先輩の失敗談や助言を糧にしたりして、失敗や不安、課題を乗り越えようとする姿を引き出すことができた。詳細はⅡ章3-2で述べる。</p>
	②菓子工房 クッキー製造 作業学習「作り手としての自覚を もって取り組もう」(4月～)	<p>クッキー製造グループでは、自分たちが作っているクッキーがどのように流通していくかを知ること、「お客様」や「同僚」「協力工房」への感謝や「作り手」としての誇りを意識して、より主体的にクッキー作りの仕事に取り組めるようになってほしいと願い、授業作りを行った。</p> <p>菓子工房の他部門の見学、新作商品の製造にまつわる試行錯誤等の出来事を通し、生徒自身が「お客様に喜ばれる製品を作るために」自分は何ができるのか、何をしなければならないのか考え、実行することで、より責任感や自信を引き出すことができた。詳細はⅡ章3-3で述べる。</p>
	③進路指導の充実改善(4月～)	<p>一年次(平成26年度)、二年次(平成27年度)からの成果と課題を受け、企業就労アセスメント実習を充実改善させた取組である。企業就労アセスメント実習計画と内容の確立、評価シートの作成、進路指導計画及び生徒と保護者へのキャリアガイダンスの観点の整理、評価結果の個別の指導計画への反映について検討した。詳細はⅢ章で述べる。</p>

②学校だけで完結しない学習活動の取組

過年度の研究に引き続き、学校だけで完結しない学習活動となる授業実践を行った。学部として、学校全体として取組を重ね、様々な分野での実践が増えていくことで地域協働学習への意識が変化してきた。「地域に必要とされる学校・必要とされる生徒を目指すこと」、「感謝や期待の声をかけられることを通して“必要とされる実感”を感じとる経験ができる」、「“支援される・する”という関係とは違う“新たな価値”を互いに生み出すもの」等の地域協働の意義(森脇 2014)という視点から評価するとまだ課題が山積する状態ではあるものの、地域の方々や外部の機関との活動が児童生徒の育ちになぜ必要か、どう関係するかを考えて計画を立てられるようになってきた。児童生徒にとっても外部講師や外部機関の方々の存在が“学校以外の人(他人)”から“一緒に活動をする人(協働の相手)”に変化してきたと感じる。

(3)「キャリア教育の視点」から3年間の研究を振り返る

本校では、キャリア教育の視点を取り入れた研究に取り組み始めた当初から、森脇勤氏、木村宣孝氏、菊地一文氏に助言をいただいていたことで、キャリア教育を職業のための指導として捉えることなく、キャリア教育の二つの意味（「キャリア発達を促す教育」、「教育活動を見直し、改善を図る」⁽⁶⁾）を踏まえて、子どもたち一人一人のキャリア発達を支援するという視点に立ち、現在行われている教育活動全体の見直しを図り、改善するというキャリア教育の本質に沿って実践を積み重ねることができた。

三氏からは講演、助言を通して「子どもたち一人一人が諸活動に向かう際の“なぜ”“何のため”を大切にし、“何を”“どう学ぶ”のかを支援することによって、学ぶことの意義につながるようにすること、そしてそのために教師自らが“なぜ”“何のため”という原点にもとづいて、教育課程や授業の一つ一つの持つ意味や意義を問い直し、“何を”“どのように”行うべきかを見直し、改善・充実を図り、組織的につないでいくことがキャリア教育の本質である」⁽⁷⁾ことを何度も教示していただいた。

そして、「自分の願いや夢を持てるようになるプロセスの中に障害受容の問題や自己肯定観が必ず含まれている。“今”の自分を肯定的に受け入れていくことが、夢や願いを育てる環境となる。“生徒自ら作るキャリアプラン”の取組は取りも直さず生徒一人一人の内面を見つめることからしか始まらない」⁽⁸⁾と、児童生徒一人一人のキャリア発達を内面の変容を推察することで捉えようとする本校の研究をいつも励ましていただいた。

三年間の研究を振り返り、①「キャリア発達を促す教育」の点からと②「教育活動を見直し、改善を図る」の点からまとめてみたい。

①「キャリア発達を促す教育」から実践の取組を振り返る

前述の通り、本校では過年度の学校研究の成果を踏まえ、児童生徒一人一人のキャリア発達を内面の変容を推察することで捉えようとし、実践を始めた。一年次（平成 26 年度）はキャリア教育やキャリア発達支援の概念を整理し共通理解するとともに、児童生徒の内面の変容を捉えながら授業実践を評価しようと試みた。しかし、児童生徒の行動や言動を含むあらわれの見取り方を明確に示すことができなかったことから、内面の変容の捉え方について客観性を欠く印象を与え、教育研究会等で「どのような方法で内面の変容を捉え、評価するのか」と、質問を受けることもあった。

そこで二年次（平成 27 年度）は「キャリア発達支援における評価の在り方」について実践研究を進めた。学習活動の中で児童生徒の行動や言動を即時に捉えると同時に、行動や言動の背景となる児童生徒の思いを推察しながら、授業や単元のまとまりの中でキャリア発達支援を行うという視点で、児童生徒の内面を丁寧に見取るための観点や方法を探った。議論の中では、教師の推察の客観性や学習の経験が内面の変容にどのようにどれだけ影響したかの根拠をいかに示すかについて等、課題と難しさも話された。

三年次（平成 28 年度）は学習活動や体験を児童生徒自身が確かな経験につなげていけるような「キャリア発達支援における授業作りの在り方」を探る実践研究を進めた。実践を進めるにしたがって、「キャリア発達を促す」ための定型の授業はなく、授業の時間的、空間的流れの中において、児童生徒が物事にどう取り組んでいくかを連続して捉えていくことで、児童生徒の学びの育ちである「キャリア発達」が見えるのだと分かった。児童生徒の学びのプロセスと教師の授業作りのプロセスの両面に注目し、「授業で児童生徒が“なぜ”“何のために”“何を”“どう学ぶ”

のかを教師がどのように設計し支援するのか」や「設計された授業の中で児童生徒が“なぜ”“何のために”“何を”“どう学んだ”のか」を授業や單元ごとのまとまりの中で評価していく必要があるのではないかという考察に至っている。

3年間の各学部の実践を振り返ると、キャリア発達を促す視点での授業作りが徐々に根付き、学校として各ライフステージで育みたい資質や大事にしたい支援の在り方が明確になってきたと感じる。各学部で“なぜ”“何のために”“何を”“どう学ぶ”のかの観点で学習活動を整理できるようになり、授業作りに生かせるようになってきた成果として捉えたい。今後も定期的に「本校におけるキャリア教育の捉え（2ページ）」に立ち返りながら、授業作りを省みたり、新たな授業を企画したりしていくことが大切であるとする。その際、学習指導要領改訂の方向性も考慮していきたい。

②「教育活動を見直し、改善を図る」から学校の在り方を振り返る

「教育課程や授業一つ一つの持つ意味や意義を問い直し、“何を”“どのように”行うべきかを見直し、改善・充実を図り、組織的につないでいく⁽⁷⁾」作業を進めることは、平易ではないこともあった。また、個別の指導計画の活用等実践が十分に至らなかった面もあった。しかし、学習活動や学校行事、教育課程が児童生徒にとってどのような意味付け・価値付けをもたらすのか、“なぜ”“何のために”実施されているのかを教師が自問自答したり、協議したりできたよい機会となった。

3年間の研究期間を通して、“児童生徒が学習にじっくり取り組むため”、“地域協働型学習を実施するため”、“時代の変化に合わせた新しい学習に取り組むため”の観点から学校全体で、また各学部で検討を重ね、少しずつ具体策として実現できるものが増えてきた。意義を創出し新設した活動やより児童生徒の実態や時代に合った形に変容させた活動、教育的な効果を認めつつも廃止した活動等に学習活動や学校行事を整理することができるようになってきたことは、教師が“教え込む”役割だけではなく“人に出会う機会”や“児童生徒が自分の体験に気づき、自己の体験の価値を認識できる⁽⁷⁾場”をつくる役割を担えるようになってきた成果と捉えたい。

三年次（平成28年度）より運用が開始された活動の一部を表Ⅰ－10にまとめた。

表Ⅰ－10 三年次（平成28年度）運用が開始された活動（一部）

活動名等	内 容
<div data-bbox="216 1496 456 1525" data-label="Section-Header"> <h3>小学部ミニ運動会</h3> </div> <div data-bbox="216 1536 608 1993" data-label="Image"> </div>	<p>全校を挙げて毎年5月に実施していた運動会を、児童生徒が年度初めから学習にじっくり取り組むために行事を精選する観点から平成28年度より廃止した。</p> <p>小学部ではミニ運動会を新設し、児童が意欲的に活動できるプログラムを検討し実施した。種目はかけっこ「よーいドン」、団体競技「バケツ☆リレー（玉運びゲーム）」、親子競技「どんどんいれるぞ（玉入れ）」、4色対抗リレー（児童全員参加）である。小学部のみの行事のため待ち時間が少なく、どの競技も見通しを持って活動できる環境を整えたことで、児童は従来の運動会より意欲的に参加することができた。</p>

活動名等	内 容
<div data-bbox="150 533 181 656" data-label="Text"> <p>中 学 部</p> </div> <div data-bbox="208 237 512 271" data-label="Section-Header"> <p>地域交流委員会の新設</p> </div> <div data-bbox="219 284 581 526" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="208 562 573 598" data-label="Section-Header"> <p>総合的な学習の時間の新設</p> </div> <div data-bbox="247 607 503 945" data-label="Image"> </div>	<p>中学部では委員会活動の見直しを行った。地域交流委員会を新設し、地域の寺院で毎週水曜日開催されている朝市に1ヶ月に1回参加し、地域の方々と交流できるようにした。生徒は「学校外の人」と話す機会にまだ緊張しているものの、地域の方々に優しく受け入れていただき、「お寺に行く」活動を楽しみにし、自分たちの作った作業製品を販売したり、朝市の品物を購入したりした。地域の方々に本校の名前を知っていただける機会にもなった。</p> <p>生徒が体を動かしたり、課題を探究したりする活動をできるよう月曜5・6時間目に総合的な学習の時間を新設した。</p> <p>前期は全体でゲームや自転車で体を動かす活動をし、後期はスポーツ等で体を動かす「ニュースポーツ」、手芸・工作など好きなものを作る「つくってわくわく」、中学部の生徒が楽しめるイベントを企画・計画・準備・運営する「ハッピー企画」の3グループに分かれて活動をした。自分の興味関心、目標から生徒自身がグループを選択し、より意欲的に授業に臨むことができた。</p>
<div data-bbox="150 1373 181 1496" data-label="Text"> <p>高 等 部</p> </div> <div data-bbox="208 965 421 996" data-label="Section-Header"> <p>防災学習の取組</p> </div> <div data-bbox="208 1030 589 1229" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="208 1274 589 1509" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="208 1585 570 1619" data-label="Section-Header"> <p>自分の学部についての紹介</p> </div> <div data-bbox="232 1639 573 1892" data-label="Image"> </div>	<p>高等部では生活単元学習の一つとして4月から防災学習に全学年で取り組んだ。日頃から防災についての意識を高め、安全に身を守るための知識や技能を身につけることをねらいとした。個人用の防災リュックの中身について考えたり、学校にある備蓄品を調べたり、防災食の試食をしたり、ライフラインについて学習したりする活動を通して自分の生活の中に防災意識が芽生えるように願った。7月には防災合宿を実施し、自分達の用意した防災リュックの備品が役に立ったかや避難生活を疑似体験して思ったことを自分の言葉でまとめた。</p> <p>11月の学習発表会では、ステージ発表で取組や感想を伝えたり、体験コーナーで防災食の試食や手作り段ボールベッドで寝心地を体験してもらったりして他学部児童生徒や保護者に防災学習の成果を紹介した。</p> <p>高等部の生徒が自身の学んでいる環境（学校生活、授業、進路に関する学習等）について、自分の言葉で他者に伝える機会を持ちたいと願い、様々な場所で、様々な人に対して学部紹介を行う機会をつくった。学校説明会、研究協力者会議、体験入学、産業フェア、教育研究会等様々な場で説明する体験を通して、高等部生徒としての自覚や責任感、人前で話す度胸等が徐々に増えてきた。</p>

引用文献

- (1) 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター (2012)「キャリア教育をデザインする『今ある教育活動を生かしたキャリア教育』」
- (2) 菊地一文 (2013)「特別支援学校におけるキャリア教育の推進状況と課題」『特別支援教育研究 9月号』東洋館出版
- (3) 平成 27 年度本校研究フォーラムでの吉川一義氏 (金沢大学人間社会研究域教授) の発言より
- (4) 渡辺三枝子 (2010)「キャリア教育実践上の鍵」 渡辺三枝子・鹿島研之助・若松養亮「学校教育とキャリア教育の創造」学文社
- (5) 渡辺三枝子 (2012)「キャリア教育の理念と今後の課題」 「季刊 特別支援教育 No. 46」東洋館出版社
- (6) 渡辺三枝子 (2008)「キャリア教育ー自立していく子どもたち」東京書籍
- (7) 菊地一文 (2016)「特別支援教育 ONE テーマブック ⑩ 気になる子のためのキャリア発達支援」学事出版
- (8) 森脇 勤 (2011)「学校のカタチ デュアルシステムとキャリア教育」ジアース教育新社

参考文献

1. 本校研究紀要 平成 24 年度、平成 26 年度、平成 27 年度
2. 吉川一義 (2011) 平成 22 年度本校教育研究会 シンポジウムにおける発表資料
3. 吉川一義 (2014) 平成 26 年度本校研究フォーラム パネルディスカッションにおける発表資料
4. 中央教育審議会 (2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」
5. 文部科学省 (2011)「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育の手引き」
6. 木村宣孝 (2013)「特別支援学校知的障がい教育校におけるキャリア発達の支援について」第 48 回全国特別支援学校知的障害教育教頭研究大会北海道大会 特別講演記録
7. 渡辺三枝子・鹿嶋研之助・若松養亮 (2010)「学校教育とキャリア教育の創造」学文社
8. 名古屋恒彦 (2015)「子ども主体の生活を実現する領域・教科を合わせた指導」本校職員研修資料